

あかでみあめらんこりあ

開高健

ACADÆMIA MELANCHOLIA

あかでみあ
めらんこりあ

開高 健

角川書店



あかでみあ めらんこりあ

開高 健

昭和56年1月20日 初版発行
昭和56年2月25日 再版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

TEL (03) 265-7111 (大代表)

● 102 ● 東京 3-195208

旭印刷・大口製本 落丁・乱丁本はおとりかえいたします
0093-872294-0946(0)

あか
でみ
あめ
らん
こり
あ
●
目次

初期長編小説 ● あかでみあめらんこりあ
――― 五

解題 ● 『あかでみあめらんこりあ』の時代
向井 敏
――― 一七

伊奈三郎の靈に

——一九五〇年十二月下旬

あか데미あめらんこりあ

ACADEMIA MELANCHOLIA

ああ われらをなぐさめて
生きゆく力をめぐむものは
死 なり そは われら
が生の目的にして 唯一の
希望なり 霊液のごとくわ
れらを昂らせ 酔わしめて
日暮れまで あゆみつづ
くる勇気を 与うものなり

ボオドレエル
“貧者の死”

I

しめったリノリウムをべたべたスリッパのふむ音がしたので青年はふりかえった。看護婦がちかづくと消毒液の匂いがした。

……だめだそうです、面会はできません。お待ちになるんです
ら……

青年はハترون紙袋をかかえた腕をかたくひつつけて両手をごわごわした
灰色の帆布地のジャンパーのポケットにつっこんだ。みじかく刈った髪は匂
いのなくなったボマードでこし波うって光った。顎をジャンパーの襟にし
っかりくつつけた・ぼんやりした瞳が看護婦の乾いた・白粉の匂いのする・
ちいさい顔をみつめ、ひくい声で、

……そうですか。手術はどんなぐあいですか？

看護婦は顔をあげた。しばらくじっとしていた。それから視線を相手にもどした。すこしよごれたカンバス地の襟穴に、国立大学のバッジが銀色にひかっていた。相手の瞳は暗い穴のようだった。

いまリングルを打ってます。衰弱と出血多量ですから何とも今のと

ころはわかりませんけど……

手術がおわったら面会できるでしょう、お待ちになりますか？

大学生はうなずいた。

ええ。ちょっと、つれをよびますから。

靴の裏金が濡れたコンクリートの上をカチャカチャ音をたていそぎ足に玄関をでていった。看護婦が壁にもたれていると、うすぐらい玄関へ柱の蔭から女が姿をあらわした。女はちよつとたちどまった。髪が雨に濡れているらしい。からだをつつんでいるレイン・コウトが灰色の光線のなかで水からあげたセロファンのようにひかかった。女はすこしのけぞり、肩からつるした

浅青い・なめらかにひかったバッグをつかんだ。ハترون紙袋を胸に片手でだいた大学生は女をうながした。看護婦は、あるきはじめて女をみて、水のいっぱいはいったコップをもつて廊下をあるいているみたいだと思った。近くに寄ってきたのを見るとまだ若い女だった。つめたい・澄んだ・くらい腫でこちらをみた。

……じゃ、どうぞ。こちらです。

薄い革のスリッパがべたべたと水をたたいているような音をたてた。廊下は薄暗くしんとしており、石炭酸の匂いが、うごくとかすかにゆれた。看護婦はだまって廊下をまがると待合室のノブをがちゃりと音たててひらいた。大きなガラス窓の向うに中庭の灰色の植木と向い側の病棟のねずみ色によごれた・長いくねった雨の汚みがでている壁やくらい窓がみえた。

じゃ、また呼びにきますから、それまで。……三十分ほどでおわる筈です。

大学生はみじかい髪をかきあげ、どうもすみませんでしたとひくい声で頭

をさげ、すぐ顔をあげた。看護婦は部屋をでるとき、あの若い女が背をまっすぐのばして壁に添った長椅子に腰かけているのをみた。

大学生は窓ぎわをはなれて長椅子のところへもどってきた。新聞や週刊誌のちらばっている机の上へハترون紙袋をおくと、中をさぐり、タバコのあたらしい袋の封をやぶった。かこんだ手のなかでマッチがちいさな爆発の音をたて火の色が影になった指の間でちらちらした。女はちよつとよこへ寄った。古い・茶褐の模造革はつめたくてヒビ割れて、わに革のような手ざわりがした。彼は目をほそくしてタバコを唇から剝がし、窓の方をむいてまたいた。そしてすぐまた、くわえ、壁へもたれ、中庭をじつとながめた。

雨が壁に吸われてしみてくる気配、夕暮れがちかい、傷をうけたように壁が白くうかんでいる。石炭酸の匂いがしのびこんでいた。ふいにどこかで戸をあける音がした。彼は頭をもたげてじつとかたくなり、足音が部屋の前を通りすぎて遠ざかり消えてしまうまで、待った。そしてまた、壁にもたれかかった。唇のタバコは煙をたてなくなっていた。黒い・長い灰がぼとりとお

ちた。ちいさな吸殻をふきとばすと肩をあげてふかく息をすいこみ、ポケットから新しいのをさぐりだしてマッチのつよい・ちいさな火を唇にうけた。女は両手をポケットに入れていた。うすぐらいなかで女のレイン・コオトは雨のひかりにぬれてうすい膜のようにびかびかし、それを透して匂いの失せた・こわばった肉体のつつまれているのがはつきりと感じられた。彼女はのけぞるように顎をあげた。頬にかげりがおこった。肉のおちた瞼のしたでやや反った睫毛がうごいていた。ちいさい・すこし骨ばった顔は古い・白い漆喰壁のような皮膚、つよくこすると痕がありありとのこりそうだ。唇は乾いて、下唇がすこしひっこんでつばまっているので、ときどき子供のような表情を帯びた。うすい膜がその上できらきらしている澄んだ・くらい腫が朽ちた穴のようにあらわれた。

……いま何時ごろ？

彼は時計をもっていなかったので六時ぐらいでしょうと云い、ハترون紙袋に手をのばした。鉛筆で大きな字で走り書きしたザラ紙の束をとりだすと

赤鉛筆でチェックしたり字を消したり、書きこみをくわえたりしはじめた。

彼女は顎を襟にくっつけ、砂のこびりついた・白いズック地に濃褐のエナメル革がまだらについているゴム靴の両方をそろえて前にだし、右と左をみくらべた。彼は赤鉛筆をおいて、窓の外をながめた。埃まみれのような・大きな葉のかさなつたいちじくのくらい茂み……

ぬれたズボンの裾をあげると海軍士官用の黒革の半長靴がその下からあらわれた。すてられたタバコのたてる青い・細いけむりが泥にぬれた靴の先にたちのぼってきた。ずいぶんながいあいだそうしていてから、ふたりは用心ぶかく深呼吸した。

彼は唇のあいだにタバコをはさんだまま、長椅子の肘掛にもたれ、じっとしていた。雨は夕暗^{ゆふぐら}をもしずめるようにしつつその隙間から音をたててふりはじめ、部屋のなかにはジメジメして雨のにおいがクレゾールを、うすめた。彼女はのびあがって、もういちど、ふかく呼吸しすこしバンドをゆるめた。そして額に手をあてた。ひっくりかえったおもちゃ箱のうちからどれをえら

んでいいのか当惑していることのような表情が、うつむいた彼女の顔をかげらせた。彼女は額と頬にかぶさった髪をはらおうとして頭をふりあげた。くらくらしかけた床の上に黒革の半長靴が、ズボンの裾から、水にぬれた・にぶい・なめらかなつやを帯びて、ひかっていた。彼女はリノリウムに流れた・びちゃびちゃした汚^しみの痕をぼんやりと、目で追った。義彦は火のきえたタバコを唇に垂れて窓の外を眺めていた。額と鼻の線が溶暗されのこって、光線のさしてくる方をむいてぼんやりとひかっていた。彼女の心臓はとつぜん思いだしたように、からっぽのからだのなかで、どきどきした。すこし息苦しくなり、いらだたしげでもの憂い表情となり、じっと瞳^めをひらいたまま発作をしのぶのだった。

ときどき義彦の身うごきを感じた。彼女の重い血液もまた逆行をはじめていた。その領域はうすぐらくてよく見えず、音も色や影となり、しばしば不意の陥^かし穴にはまってはげしい・時には息のつまるショックが、彼女を、現在へまいもどらせたが、しばらくすると血液は、ふたたび、その別な時間の

方へと、うごきだすのだった。灰色の光線がさす影のなかで彼女は、いまひとつの生を調査し・発見し・熱中し・反芻する……肉も吸収されて。

七月の中旬、夕方、ドガで逢った計介はびったり長い脚についた粗い地のズボン、膝でくみあわせると、よく手入れされた・やわらかい黒革の半長靴が、のぞいた。膝をほぐすとズボンのしたにかくれて、それとはわからない。彼は壁にもたれて頬をつき、つかれた犬のように顎をつきだして掌^てにのせていた。しじゅう片手をポケットにいれては、あたらしいタバコをつまみだした。黄いろいニッケルが銀鍍金^{ぎんごうきん}のこまかい唐草模様のしたから地肌をみせている細長いライター、つよくこすると淡い・ちいさな焰が金属のなかに咲いた。彼の頭上に灰色にくすんだ・鉄色の剛毛^{こげ}を肌にまきつけた棕櫚^{しゆ}の大きい葉、もうもうとした・匂いのつよいタバコのけむりを透かすとそれは緑色にひかった。薄桃色のやわらかい・ふかぶかした紙を張った壁に腕の形をしたさきで青い・透織^{すかしおり}のシェードをかけたスタンドがあかるく、踊子やダンス場